大人には見えない物語

４月２９日、松戸市の２１世紀の森と広場で行われた、緑と花のフェスティバルで「木のキのクイズ」コーナーを担当しました。「木に触れて、匂いをかぎ、何の木かあてる」というクイズです。クイズに答えると花のタネがお土産でした。簡単そうに見えて以外に難しいことが分かりました。

用意した材は主に街路樹の伐枝、木材の端材で、クスノキ、イチョウ、ユーカリ、フウノキ、スギ、ヒノキ、加えてローズマリー、ローリエなどのハーブも。

「木のキのクイズ」はというと目立たないこともあって、来客数は多いとは言えませんでしたが、それでもお子さん連れ、ご夫婦、年配者とたくさん来ていただきました。

ローズマリーは特徴があり、お客さんが立ち止まって眺めるだけでも名前はすぐに出てきました。ヒノキ、スギは香りが独特ですが、正解に達したのは２割くらいでした。

クスノキは香りに癖がありますが、なかなか答えに到達しませんでした。樟脳の素になると種明かししても若い世代には通じないようでした。正解の「クスノキ」を伝えて反応したのは小学生や幼児でした。「トトロのクスノキだ」というのです。

私たち世代は「トトロ」といってもなかなか通じません。アニメーション「となりのトトロ」に登場し、森の中のクスノキの根元の空洞に住んでいます。３５年も前の作品でありながら、未だに子どもの間で観賞されているロングセラーです。トトロの映画を見ていなくても、なんとなく頭の片隅におぼろげながら浮かんでくる巨大なネズミのような動物です。

トトロの場面設定はこうです。昭和２０年代から３０年代、二人の姉妹さつきとメイは両方とも五月を意味し、初夏から夏にかけての季節の物語です。水田では稲が成長し、引っ越してきた草壁家の周りに咲く植物もヒメジョオン、ノゲシ、シュロ、森の中にはジロボウエンゴサク、カタバミ、ヤブヘビイチゴ、ドクダミ、ユウスゲと季節感もぴったりです。

まっくろくろすけ、ねこバスやトトロは子どもには見えて、大人たちには全く見えないファンタジーな世界です。妹のメイが七国山病院に入院中のお母さんにお見舞いに行くことから物事が回り始め、ねこバスやトトロが登場して展開していきます。

宮崎駿監督は、こうした自然観をもとにして、日本の自然をテーマにしたトトロやもののけ姫などの作品を作り続けてきました。ほかにも、「風の谷のナウシカ」、「千と千尋の神隠し」など日本の自然や文化に根差した作品が多いことが分かります。

「トトロのクスノキだ」という子どもの言いようから、子どもとみどりをつないでいる糸が垣間見えたように思いました。

子どもの心の中にしっかりみどりが根を張っているのではないかと、でも大人には見えません。なにせトトロの世界ですから。

（松戸市　藤田　　隆）

椿を訪ねてお馬鹿な旅②

久留米の園芸椿　正義（まさよし）を海外に伝えたシーボルトの話です。

久留米は江戸時代から植木や苗木の生産が盛んな地域でした。今日でも椿苗は生産量でも、新品種開発の豊富さでも全国有数です。

海外で「ドンケラリー」として知られているジャポニカ系のツバキがあります。これは久留米地方を中心に江戸時代から普及している「正義(まさよし)」のことで、濃い紅色の花弁に大小の白斑が入った美しい花を咲かせます。

鎖国時代の日本に長崎・出島で西洋医学を伝えたシーボルトですが、ヨーロッパにはない常緑樹の椿の美しい花に目を奪われました。文政 12 年（1829）12 月、シーボルトはオランダ船ジャワ号に、植物と動物の標本、生きた植物のコレクションを積み込み、日本を離れました。その中に「正義」が含まれていたのです。航海中、多数の植物が枯れましたが、翌年 7 月にアントワープ港に到着し「正義」を含むツバキの接ぎ木苗 5 株は枯死寸前で荷揚げされました。「正義」は植物園で養生され、息を吹き返します。そして、植物園長の名にちなみ「ドンケラリー」と命名されました。ドンケラリーはシーボルトらの尽力で欧米に広まり、その大輪の花は冬のバラとして愛されました。ヴェルディが 1853 年に発表したオペラ「椿姫」が出来たのも日本の椿が一役買っている訳です。

久留米市内の草野町周辺には今でも樹齢 300 年超えの「正義」の古木が 6 株あります。そのいずれかが「ドンケラリー」の母株といわれています。（以上　オフィスケイ代表　田中　敬子氏の文を抜粋　加筆）

私が正義（まさよし）に会いたくて久留米市の草野地区を尋ねたのは何十年前だったか、何のつてがあったのか今では記憶が定かではありませんが、ともかく立派な門を開けてもらってお屋敷の奥庭に通されました。

出迎えてくれたのは８０歳を超えていると思われるやせ型の老人で、柔和なお顔でも眼光が鋭い印象でした。

庭には樹齢数百年と言われる大木があって圧倒されるような美しさでした。

お茶にしようと座敷に呼ばれた時、廊下の長押に年代物の槍が飾られているのが見えましたから、土蔵には甲冑や腰に差す大小があるかも知れません。ご先祖は苗字帯刀を許された大名主か久留米藩の藩士の身分だったと思われます。当時の私のような若造には恐れ多い場面でした。見た所では大きなお屋敷に一人暮らしの様子で、倅は福岡で大学教授をしていると話していました。

年賀状だけの付き合いが暫く続いた後、ご子息から喪中はがきが届き縁遠くなりました。

この記事を書くに当たり、久留米の最新情報を検索すると市の椿フェスタや民間椿園の椿祭りもあり今でも官民挙げて椿を盛り上げているのが分かりました。

（写真は椿祭りのポスターより引用）

佐倉市　坂本　文雄

子どもの好奇心を大切に、コワイ相手との正しい距離感を

「虫」をテーマにした観察会であっても、この頃は家族連れが多く、始まる前から草むらに虫を探す子がいるかと思うと、パパ・ママが何とか虫に触れ合わせようとしてもなかなか親のそばを離れず、すぐに泣き出しそうになる子もいる。

私はそういう子どもを見ていて、いつも動物の本能と、ホモ・サピエンスが進化して今のように文明を築いた（築きすぎたかも・・）ということについて思いをはせてしまう。

生き物は、その本能として自分の身を守らなくてはならない。だから、「知らないもの・よそ者に対峙した時には身構える」のは当然のことで、幼い子がいつもそばにいる親以外のよそ者を見ると泣き出したりするという「人見知りの時期」があるのはむしろ生き物本来の姿だと思う。よく「この子は人見知りが激しくて・・」とお母さんが困ったような、でも少し嬉しそうに言うのを聞いたりすると、思わず微笑んでしまう。全く無防備な赤ちゃんにとって、いつもそばにいてミルクをくれ、世話をしてくれる存在は自分の生命維持にとって不可欠だ。生まれて何か月か経ち、いつも自分のそばにいるのが誰かがわかるようになると、「よそ者」が突如目の前に現れると身構えて泣き出すというのは至極当たり前のことで、逆に、誰に対してもニコニコしているということはかえっておかしいのかもと。

ただ私は、人類の中でホモ・サピエンスだけが文明を築けたのは、「よそ者」に対して身構えながら、それを跳ね除ける好奇心を持つようになったからではないかと思っている。物心つかないうちというのは、親や仲間から「〇〇には近寄るな、△△からは逃げろ・・」などというような、危険な事柄について徐々に学習する時期でもあるが、つい子どもの中には、「〇〇は何だろう？」という好奇心が勝ってしまって、目の前にいるハテナの対象に近づいて・・というようなことが起こるもの。そのため、そういう子は獣に襲われて命を落とすことも多かったかもしれないが、大人が手を出せない新しいことを発見することもきっとあったはず。他の生き物は成長するにつれて、好奇心は危険察知機能のためにほとんどなくなっていくものだが、ホモ・サピエンスの場合はそれが大人になってもなくならなかったのだろう。最初は生存のためもあったろうが、あの山の向こうには何があるのだろうか、などと意味もなく好奇心を働かせていったのだろうと。

今の人類と共存していた時期があったネアンデルタール人は家族単位、つまり「よそ者のいない単位」で暮らしていたという。家族単位では新しい技術が生まれても広がることがなく、気候変動の激しく厳しい環境に適応できずに滅んでいったとされている。つまり現在の研究からは、新しくやってきた私たちの先祖のホモ・サピエンスが、既に長く生きてきた彼らを滅ぼしたというのではなく、あくまでネアンデルタール人がその家族単位の暮らしということから、環境の変化に対応できず徐々に滅んでいったということのようだ。一方、私たちの先祖はその好奇心で果敢に（身を守るという本能に逆らったりもして）新しい環境に向かっていき、家族以外のものも含めた多くの者が一緒に暮らす集落を作り、新しい技術を産みだしては広めていって（つまり情報の共有を行い）今に至ったのだろうと。

さて、「虫」はどうしてコワイのか？と考えたとき、実は虫がコワイのではなく、私はたまたま今いる「よそ者」である虫との距離感がつかめないからコワイのだと思う。生まれてからいつも虫がいるようなところで暮らしていたら、Ａという虫、Ｂという虫、というふうに様々な虫に対してそれぞれどう対応すればいいか自ずと身についてくるはずで、逆に虫などゴキブリくらいしか知らないヒトにとっては、「虫って気持ち悪いもの、ニュースでときどきその被害を放送されているスズメバチって超つきのコワイもの」としか思えないのは当然のこと。というより虫に限らず、一般的に自分にとって見たことのない人やモノに対してはどう対応すればいいかわからないもので、事前にその人、そのモノについてある程度の情報を持っていれば、それなりに相手との距離感が何とかなるような気がするものだろう。

観察会でいくら「コワくない、大丈夫」と口で言っても怖がる子にはなかなか通じないもの。本能的に知らないもの、よそ者に対してはコワがるのは当然と思い、逆に全くコワがらずに虫を追いかける子がいるのを見せて安心させたり、痛くない虫の持ち方を示してみたりして、コワがっている相手との安心できる距離感ってこんなものかなって教えてあげるのがいいかなと思っている。

子どもは本来好奇心が旺盛で、コワイもいつの間にか好奇心で乗り越えてしまうもの。だから、大人がただ「あれもしちゃダメ、これもしちゃダメ」とか、わけもなくただ「危ないからダメ」というのではなく、「ココまでなら大丈夫」とか、「こういうわけだからそばにはいかないこと」くらいの、子どもの好奇心をある程度満足させられる対応を大人がとれるよう心掛ける必要があるのかなと思う。大人だって、コワイはずのスズメバチについて正しい知識を持てば、ここまでなら大丈夫とか、この時期は近寄ってはいけないとわかり、コワいはずの相手との正しい距離感をつかめて、本来持っているはずの好奇心をくすぐられるではないか。

どこまでやれば危険であるかを伝え、逆にどうすれば、安全に生き物と対峙・接触できるか、それを観察会などを通じて伝えるのが私たちの役目かなと思う。

太田慶子（千葉市）

←蛇好きの人は、毒蛇であるマムシも嬉々として捕まえ、首をつかんで見せてくれる。マムシという相手との正しい距離感を知っているからだろう。マムシはだらりとして、他の蛇のように尾を持ち上げることはなく、おとなしい。